

## 幼児の分裂文の理解について

團迫, 雅彦  
九州大学大学院人文科学府

水本, 豪  
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/9211>

---

出版情報 : 九州大学言語学論集. 28, pp.107-121, 2007-07-31. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室

バージョン :

権利関係 :

# 幼児の分裂文の理解について

團迫雅彦<sup>a</sup>・水本豪<sup>b</sup>

(九州大学大学院<sup>a,b</sup>)

dansako@lit.kyushu-u.ac.jp<sup>a</sup>, gonchi@lit.kyushu-u.ac.jp<sup>b</sup>

キーワード：言語獲得 分裂文 格助詞 先行文脈

## 1. はじめに

我々が日本語の文を理解する際には、文を構成する名詞や動詞の意味だけではなく、それらの関係を表す格助詞の情報も必要である。日本語を母語として獲得する幼児を対象にした従来の研究では、格助詞の情報の利用可能性について二つの異なる見解が示されてきた。一つは、ある発達段階において、幼児は格助詞の情報に依存せず、語順の情報のみを用いて、動作主・被動作主の関係を同定し、文を理解することがあると考える立場である (Hayashibe 1975)。例えば、(1)のようなヲ格名詞句がガ格名詞句に先行するかきませ文を見てみよう。

(1) ブタさんを ウマさんが 押した。

この文は格助詞の情報に基づき、「ブタさん」は被動作主、「ウマさん」は動作主であることが分かる。ところが、幼児はそのような格助詞の情報を無視するように、最初の名詞をその文の動作主、次の名詞を被動作主とする反応が観察されている。つまり、文が「名詞 (N)－名詞 (N)－動詞 (V)」(以下、NNV と略記) という語順である際には、格助詞に関係なく、動作主、被動作主の順序で幼児は理解しているということである。

もう一つの立場は、これまで語順の情報のみで理解しているように見えたのは、実験の設定の問題に過ぎず、発達のどの段階でも幼児も成人と同様に格助詞に基づいて動詞との関係を同定し文を理解していると考え

える立場である (Otsu 1994)<sup>1</sup>。この立場を採る Otsu (1994)は、(1)のような文におけるヲ格名詞句は談話上話題として機能していると考え、(2)のようにヲ格名詞句に相当する要素を先行文脈として導入して実験を行った。その結果、幼児は成人と同様の反応をすることができると報告されている。

- (2) 公園に ブタさんが いました。  
そのブタさんを ウマさんが 押しました。

しかし、これまで扱われてきた文はかきまぜ文などごく一部に過ぎず、幼児の言語理解における格助詞の利用に関する二つの立場のうち、どちらが妥当であるのかは依然として決着が着いていない問題である。そこで、本稿では(3)のような分裂文に着目したい。

- (3) a. *Subject Cleft*  
ブタさんを 押しているのは ウマさんだ。  
b. *Object Cleft*  
ウマさんが 押しているのは ブタさんだ。

(3a)では主語名詞句が、(3b)では目的語名詞句がそれぞれ文末に生起していることから、前者は *Subject Cleft*、後者は *Object Cleft* と呼ばれる。これら分裂文の重要な特徴の一つに、文末のコピュラ「だ」が付加する名詞句には格助詞が付かなくてもよいことが挙げられる<sup>2</sup>。(3a)では、「押す」という述語の主語「ウマさん」には格助詞ガが伴われていない。一方で、(3b)では、述語の目的語「ブタさん」は格助詞ヲを伴っていない。こうした分裂文を扱うのは、次のような理由による。これら分裂文においてどちらも文末の名詞句には格助詞が存在しない。この状況で両者を区別するためには、文頭の名詞句に付された格助詞を参照する必要がある

---

<sup>1</sup> Otsu (1994)は、ヲ格名詞句がガ格名詞句を越えて移動するという文法の規則としての「かき混ぜ」を幼児が獲得していると主張している。本稿では、その主張を「格助詞の情報を利用することができる」ということに読み換えていることに注意されたい。

<sup>2</sup> ただし、「に」や「から」といった格助詞は省略できない。

る。しかも、これら分裂文は Hayashibe (1975)において示された NNV という語順ではないため、方略的に動作主・被動作主を同定することはできない。そのため純粹に格助詞の情報を利用できるかどうかを検証するためには、分裂文を用いるのがより適切であると考えられる。そこで本稿では分裂文を用いた理解実験のデータを示す。その際、Otsu (1994)のような実験上の設定の問題も考慮し、適切な文脈を補った場合と補われない場合との比較も行う。

最後に、本論に入る前に一点だけ指摘しておきたい。そもそも今回の調査対象となる年齢の幼児にとって分裂文は複雑であるため理解実験を課すのは困難と思われるかもしれない。しかし、幼児の発話データベースである CHILDES を用いて調査すると、(4)のように三歳にも満たないかなり早い段階から分裂文が観察される (MacWhinney 2000, Ishii 2004, Miyata 2004, Noji et al. 2004)。なお、(4)の下線部が該当する分裂文であり、これらはすべて三名の幼児における初出の分裂文の発話である。また、(4c)を除いて、これらの発話が周囲の発話の模倣ではなく、自然発話であることは明らかである<sup>3</sup>。

(4) a. (Aki45, Aki 2;9:14)<sup>4</sup>

\*AMO: kore mo ji ga nai ne.

\*AMO: wakatta?

\*CHI: ji nai no.

\*CHI: ji nai no wa kore!

b. (Ishii21125, Jun 2;11:25)

\*CHI: enjin ga moochotto maaru [: mawaru] kara ya.

\*FAT: enjin ga maan no.

\*CHI: un, kore ya,, maasu no wa kore ya.

\*FAT: aa, sore ga maan no ka.

c. (Noji205, Sumihare 2;5)

\*SUM: kora ochichi nonderu no wa dare ja.

---

<sup>3</sup> (4c)の Noji ファイルには先行する発話が記載されていない。

<sup>4</sup> 括弧内はファイル名、幼児の名前、発話が観察された時点の幼児の年齢の順に記載されている。また、(4)における “\*AMO” は母親、“\*CHI”・“\*SUM” は子ども、“\*FAT”は父親の発話であることを示している。

このことから、幼児は分裂文を発話するのに必要な文法知識を備えていると考えられる。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では分裂文を用いた言語獲得研究を概観し、その問題点を指摘する。第3節では先行研究の問題点を修正して行った実験結果を報告し、続く第4節では実験結果を考察する。第5節では本稿で行った実験により残された問題とその説明の可能性を示す。

## 2. 分裂文を対象とした言語獲得研究とその問題点

分裂文の理解実験の先行研究としては、Sano (1977)が挙げられる。Sano (1977)は3歳3ヶ月から6歳8ヶ月までの幼児80名を対象にして、(3)のような二種類の分裂文を用いた動作課題 (Act-Out Task) による実験を行った。動作課題とは、実験者が呈示した文が表す事態と同じ事態になるように被験者が人形等を動かすという課題である。その結果、Subject Cleft は正答率が3歳児では約70%、4歳児では約80%、5歳児・6歳児では約90%を超える高い割合であった<sup>5</sup>。興味深いことに、Object Cleft の正答率は3歳児・4歳児においては50%を下回り、5歳児・6歳児においても正答率は約70%にとどまった。この結果により、Subject Cleft が全年齢を通じて Object Cleft よりも正答率が高いことは明らかである。このことを、Sano (1977)は Subject Cleft の正答率が Object Cleft よりも高かったのは、コンピュータ「だ」の前の名詞句を動作主として解釈する幼児特有の解釈方略に基づき理解を行っているためであると説明した。従って、Sano (1977)の主張に基づくと、Hayashibe (1975)と同様、幼児は格助詞の情報を利用できないということになる。

しかし、Sano (1977)が設定した実験には一つの問題が残る。Sano (1977)の実験では実験文として分裂文が単独で呈示されるだけである。もし、幼児が分裂文を理解できなかったのが、実験文の呈示が談話上自然な状況ではなかったためであるとすれば、幼児にとって格助詞の情報が利用できないということにはならない。もし格助詞の情報が利用できるのであれば、分裂文を使用するのに適した状況下においては正しく理解できることが予測される。そこで、本稿では先行文脈を呈示した上で幼児が

---

<sup>5</sup> なお、詳細な数値は Sano (1977)には記載されておらず不明である。Object Cleft も同様である。

分裂文を理解できるかどうかを調査した。

### 3. 実験

#### 3.1. 被験者

実験に参加したのは福岡市内の視聴覚に異常の無い幼児 70 名（年齢範囲：3 歳 1 ヶ月～6 歳 7 ヶ月、平均年齢：4 歳 11 ヶ月、3 歳児 14 名、4 歳児 18 名、5 歳児 24 名、6 歳児 14 名）である<sup>6</sup>。また、今回の実験では先行文脈の呈示の有無による理解の違いがあるかどうかを観察するために、被験者を二つのグループに分けている。以下、先行文脈の呈示のないグループを「文脈なし」グループ、先行文脈の呈示のあるグループを「文脈あり」グループと呼ぶことにする。「文脈なし」グループの被験者は 34 名（年齢範囲：3 歳 2 ヶ月～6 歳 6 ヶ月、平均年齢：4 歳 10 ヶ月、3 歳児 8 名、4 歳児 9 名、5 歳児 11 名、6 歳児 6 名）である。「文脈あり」グループの被験者は 36 名（年齢範囲：3 歳 1 ヶ月～6 歳 7 ヶ月、平均年齢：5 歳 0 ヶ月、3 歳児 6 名、4 歳児 9 名、5 歳児 13 名、6 歳児 8 名）である。

#### 3.2. 実験文

各グループには Subject Cleft, Object Cleft とともに 4 文ずつ実験文が与えられる。実験文で用いられる動詞は「押す」「蹴る」「たたく」「追いかける」の 4 種類である。また、可逆事態文になるように述語の項は有生名詞（動物）を用いた。「文脈あり」グループで呈示される文脈は、以下のような分裂文が持っている特性に基づいている。分裂文は、新情報を伝える「焦点」となる部分と旧情報を伝える「前提」となる部分とが分離している構文である。例えば、分裂文は(5)のように前提部と焦点部に分けられる。

---

<sup>6</sup> 実験時には分裂文以外の文を用いて絵が表している登場人物や動詞の意味が理解できるかどうかテストを行っている。このテストに合格しなかった被験者のデータは省いている。同様に実験そのものの方法が理解できなかった被験者や、実験を最後まで受けなかった被験者も排除している。

- (5) a. *Subject Cleft*  
ブタさんを 押しているのは ウマさんだ。  
 前提 焦点
- b. *Object Cleft*  
ウマさんが 押しているのは ブタさんだ。  
 前提 焦点

(5)の前提は(6)のように言い換えることができる。

- (6) a. (5a)の前提  
 ブタさんを押した何者かが存在する。
- b. (5b)の前提  
 ウマさんが押した何者かが存在する。

このことを踏まえ、分裂文で焦点部に生起する要素を不定名詞句「誰か」に置き換え、それを「NP が NP を V」という語順の文に組み込んだ文を先行文脈として設定した。すなわち、*Subject Cleft* では「誰かが〇〇を V している」、*Object Cleft* では「〇〇が誰かを V している」のような文をそれぞれ先行文脈として呈示したということである。以上より、各グループで呈示される実験文はそれぞれ(7)のようにまとめられる<sup>7</sup>。

- (7) a. 「文脈なし」グループ  
*Subject Cleft*: 「ブタさんを押しているのはウシさんだよ。」  
*Object Cleft*: 「ネコさんが押しているのはウマさんだよ。」
- b. 「文脈あり」グループ  
*Subject Cleft*: 「誰かがブタさんを押しているよ。」  
 「ブタさんを押しているのはウシさんだよ。」  
*Object Cleft*: 「ネコさんが誰かを押しているよ。」  
 「ネコさんが押しているのはウマさんだよ。」

なお、実験では分裂文に集中するのを避けるため、フィラー文として単文を6文用いた。

---

<sup>7</sup> 実験文については本稿付録を参照のこと。

### 3.3. 実験の手続き

実験では絵画選択課題 (Picture Selection Task) を採用した。これは被験者に二種類の絵画を呈示し、実験文が表す事態と同じことが描かれている絵画を選択させる課題である。Sano (1977)とは異なる実験手法を採用したのは動作課題は何が何に対して動作を行ったのか判別し難い場合が多く見られるためである。

被験者に選択させる絵画に関しては、各実験文の表す事態と合致するものと、それとは動作主・被動作主が反対になるものを一枚ずつ用意した。また、被験者には二枚同時に呈示するため、正答となる絵画が左右のどちらかのみに偏ることがないように留意した。

実験は福岡市内の育児施設及び九州大学コラボステーションⅡ内の静かな部屋で行われた。実験の参加者は実験者二名と被験者一名である。被験者には、実験を始める前に、あるキャラクター (ノンタン) が話したことと合致する絵を選ぶように教示を行った。各グループの実験手順は概略、(8),(9)のようになる。

#### (8) 「文脈なし」グループの実験手順

1. (これからノンタンとクイズを始めるという設定で) 実験者 A (進行役) が、実験者 B (ノンタン役) が述べた文と合致する絵を被験者に選ぶよう教示する。
2. 実験者 A が「じゃあ、クイズを始めるよ。どんなお話かな？」と言う。
3. その後、絵を見せて、実験者 B が「ブタさんを押ししてるのは牛さんだよ」と言う。
4. 被験者が片方の絵を指差すなど何らかの反応を示すと、実験者 A が「当たり、じゃあ次はどんなお話かな？」と言う。
5. 3に戻り、以下繰り返す。

#### (9) 「文脈あり」グループの実験手順

1. (8)の 1-2 と同じ。
2. 被験者に絵を見せずに、実験者 B が先行文脈として「誰かがブタさんを押ししてるよ」と言う。
3. その後、絵を見せて実験者 B が「ブタさんを押ししているのはウシさんだよ。」と言う。
4. (8)の 4 と同じ。



5. 2に戻り、以下繰り返し。

「文脈なし」グループでは絵画を見せる前に先行文脈を与えないが、「文脈あり」グループでは先行文脈を呈示している。以上のような設定で、実験を行った。

### 3.4. 結果

絵画選択課題の結果を Subject Cleft、Object Cleft に分けて、それぞれを表 1、表 2 に示す。

表 1 Subject Cleft の結果 (正答数/全体の問題数)

年齢 \ グループ	「文脈なし」	「文脈あり」
3	23/32 (71.8%)	22/24 (91.6%)
4	29/36 (80.5%)	32/36 (88.9%)
5	41/44 (93.1%)	50/52 (96.2%)
6	21/24 (87.5%)	29/32 (90.6%)

表 2 Object Cleft の結果 (正答数/全体の問題数)

年齢 \ グループ	「文脈なし」	「文脈あり」
3	16/32 (50.0%)	11/24 (45.8%)
4	20/36 (55.5%)	15/36 (41.7%)
5	27/44 (61.3%)	41/52 (78.8%)
6	24/24 (100.0%)	32/32 (100.0%)

Subject Cleft、Object Cleft それぞれについて、各年齢間での等分散性を検定するために Bartlett 検定を行ったところ、Subject Cleft・文脈なしグループ、Subject Cleft・文脈ありグループにおいては等分散が認められたが、Object Cleft・文脈なしグループ、Object Cleft・文脈ありグループにおいて等分散を仮定できなかった<sup>8</sup>。そこで、各グループの比較には比率の差の検定を用いた。ただし、年齢間の比較には Holm の方法による補

<sup>8</sup> 一連の統計処理には統計処理ソフト R ver. 2.4.1.を用いた。また、有意水準はすべて 5%とした。

正を行った。

まず、各グループにおける年齢間の比較を行ったところ、Subject Cleft・文脈なしグループ、Subject Cleft・文脈ありグループにおいて、いずれの年齢の間にも統計的に有意な差は見られなかったが、Object Cleft・文脈なしグループにおいて6歳と他の年齢の間に、Object Cleft・文脈ありグループにおいて6歳と他の年齢、5歳と他の年齢の間にそれぞれ有意な差が見られた。

次に、文脈の有無に関する比較を行ったところ、5歳児・Object Cleftにおいて文脈の有無の差に有意傾向 ( $p < .10$ ) が見られた他は有意な差が見られなかった。

最後に、Subject Cleft と Object Cleft の間の比較を行ったところ、3歳・文脈なしグループと6歳・文脈なしグループ、6歳・文脈ありグループ以外のすべてに関し、2種類の分裂文の間に有意な差が認められた。

以上の結果を年齢ごとにまとめると次のようになる。3, 4歳児では総じて Subject Cleft では高い正答率で、Object Cleft では低い正答率を示しており、この傾向は文脈を伴っても変わらなかった。5歳児では、3, 4歳児と同様に Subject Cleft では高い正答率、Object Cleft では低い正答率となっているが、Object Cleft において文脈が与えられることにより、正答率の有意な上昇傾向が認められた。6歳児では、Subject Cleft、Object Cleft ともに、文脈を伴わなくても高い正答率を示していた。次節では、この結果をもとに考察を行う。

#### 4. 考察

ここで、本稿の実験結果を先行研究である Sano (1977) と比較しながら整理してみよう。その上で、本稿で得られた実験結果が何を示唆しているのか考えてみたい。

まず、今回の実験において、先行文脈を呈示しない「文脈なし」グループでは、Subject Cleft は3歳児でも70%を超えるなど、全ての年齢群を通して高い正答率が示された。一方で、Object Cleft は特に3, 4歳児で正答率が50%台に留まる結果となった。これらの点は Sano (1977) でも観察されており、実験手法を変えても同じ結果が得られるということから、より一般的な事象であることが分かる。これに対して、「文脈あり」グループでは Subject Cleft において3歳児でも90%を超えるなど全体的に高い正答率が観察されている。ところが、興味深いことに、Object Cleft

では特に 3, 4 歳児において正答率の上昇が観察されなかった<sup>9</sup>。つまり、先行文脈が与えられた効果が Subject Cleft・Object Cleft によって異なるということである。これは Sano (1977)では観察されていない注目すべき事象であると思われる。

次に、本稿で得られた実験結果を格助詞の情報の利用可能性と言う観点から考えてみよう。本稿で提起した問題は、適切な先行文脈を呈示したときに幼児が格助詞の情報をを用いて分裂文を理解することができるのかというものであった。確かに、今回の実験では、Subject Cleft は文脈が与えられない状況でも高い正答率を示しており、この場合、格助詞の情報を利用して文を理解することができているように思える。ところが、Object Cleft では 6 歳児は文脈が与えられない状況でも高い正答率を示し、5 歳児では文脈が与えられることで正答率の上昇を示したが、3, 4 歳児においては文脈が与えられても正答率の上昇が見られなかった。もし、格助詞の情報を利用できるのであれば、分裂文の種類に関係なく、文を正しく理解することができるはずである。しかし、3, 4 歳児が Object Cleft において文脈呈示の有無に関係なく理解の困難を示したことから、格助詞の情報を利用できると考える立場では本稿で得られた観察事実を説明することはできない。従って、特に低年齢の幼児が与えられた文を理解するにあたっては先行文脈や格助詞の情報のみに依存しているわけではないことが本稿によって示唆された。

## 5. まとめにかえて：残された問題とその説明の可能性

最後に、残された問題とその説明の可能性を指摘して、本稿を終えることとしたい。まず、残された問題として、Object Cleft の正答率が先行文脈の有無に関係なく上昇しなかったことが挙げられる。この観察事実が日本語を獲得するある段階において格助詞の情報を利用することができないということを真に反映しているのかどうか、あるいは他のどのような要因が影響を与えているのかは現段階では明らかではない。そこで本稿ではこの問題を説明する可能性を二点取り上げる。

第一の説明の可能性は、Object Cleft の持つ談話上の特性による説明の可能性である。Object Cleft はそもそも旧情報を担う前提節の中にガ格名

---

<sup>9</sup> 6 歳児においても正答率の有意な上昇が認められなかったが、これは文脈を伴わなくとも高い正答率を収めることができたためと思われる。

詞句を含んでいる。ガ格は新情報を担うときに使われるとすれば、いわば旧情報の中に新情報が盛り込まれることになる。もし、言語獲得のある段階でガ格が新情報を担うことしかなければ、Object Cleft は情報構造上矛盾が生じてしまう。このために、Object Cleft の理解が困難になったという可能性が考えられる。一方で、Subject Cleft は前提節の中に新情報は含まれていないため、談話上理解がしやすいということにもなる。

第二の説明の可能性は、Sano (1977)による説明を作動記憶容量の観点から捉えなおすというものである<sup>10</sup>。水本 (2006)において、團迫 (2005)の追実験が行われ、得られた結果を年齢により分類した場合には、本稿と同様に Object Cleft で低い正答率となることが示されたが、作動記憶容量による分類を行った場合、作動記憶容量が比較的大きい幼児 (水本 (2006)では作動記憶容量中群・大群) は文脈の有無に関わらず比較的高い正答率を示すが、作動記憶容量が小さい幼児 (水本 (2006)では作動記憶容量小群) では文脈による正答率の上昇が見られない (文脈情報を利用できない) ことが明らかにされた。この水本 (2006)を踏まえると、本稿の結果は、低年齢の幼児が Object Cleft を理解できないのではなく、作動記憶容量の小さい幼児が Object Cleft を理解できないというように置き換えられる。では、なぜ作動記憶容量の小さな幼児において Object Cleft で低い正答率となるのか。作動記憶容量が小さいということは、多くの情報を作動記憶上で保持することができないということの意味する。とすると、作動記憶容量が小さい幼児は、分裂文の焦点部分「・・・だ」を聞いている頃には前提部分「～のは」を保持できなくなっており、その結果、彼らの作動記憶上にあるのは「・・・だ」だけになってしまうということが考えられる。絵画選択課題における絵の選択を行う際には焦点部分の名詞句のみが作動記憶上で保持され、この作動記憶に残る唯一の部分を作主として解釈したと考えれば、Object Cleft において低い

---

<sup>10</sup> 作動記憶 (working memory) とは、何かを行う際に一時的に必要な情報を保持する記憶のメカニズムのことである。例えば、電話をかける際、我々はこれからかける電話番号を一時的に覚えて電話機に向かうことが多い。このように電話番号を一時的に記憶する際、作動記憶によって情報が保持されているものと考えられている。また、作動記憶によって保持できる情報量は作動記憶容量 (working memory span) と呼ばれ、個人によりその容量は異なるとともに、その個人差が言語理解の様々な側面に表れることが多くの研究により明らかにされている。

正答率となることは説明可能である。さらに、Subject Cleft の場合、同じように情報の保持ができず、焦点位置の名詞句を動作主として解釈したとしても正答になることから、Subject Cleft において比較的高い正答率が得られていることとも一致する。しかし、なぜ動作主として解釈されなければならないのかという問題が残される。いずれの可能性が妥当であるのかは今後の研究に委ねられる部分であろう。

## 謝辞

まず、実験にご協力いただいた、光和保育園、順和保育園、杉の子保育園、まつぼっくり保育園（全て福岡市）の園長先生を始め、保育園の先生方・園児の皆さんにお礼を申し上げたい。また、九州大学コラボレーションⅡ内での実験の機会を与えてくださった九州大学の坂本勉先生、橋彌和秀先生にも感謝したい。さらに実験助手として多くの方々にご協力頂いた。重ねて謝意を表したい。最後に二名の匿名査読者の方々からは、多くの貴重な助言を頂いた。ここに記して感謝したい。なお、本研究の一部は財団法人九州大学後援会による助成（「幼児の言語理解の発達における作動記憶容量の影響に関する研究」研究代表者：水本豪）を受けている。勿論、本稿の誤りはすべて筆者の責任である。

## 参考文献

- 團迫雅彦 (2005) 「言語獲得過程における『主語・目的語の非対称性』—日本語の『分裂文』を中心に—」福岡言語学会例会発表資料, 2005年4月16日, 於九州大学.
- Hayashibe, Hideo (1975) "Word order and particles: A developmental study in Japanese," *Descriptive and applied linguistics* 8, 1-18.
- Ishii, Takeo (2004) *Japanese: Ishii Corpus*, Pittsburgh, PA: TalkBank, 1-59642-054-5.
- MacWhinney, Brian (2000) *The CHILDES project*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Miyata, Susanne (2004) *Japanese: Aki Corpus*, Pittsburgh, PA: TalkBank, 1-59642-055-3.
- 水本豪 (2006) 「幼児の単文理解における文脈情報の利用可能性と作動記憶」『日本言語学会第133回大会予稿集』310-315.
- Noji, Junya, Norio Naka, Susanne Miyata (2004) *Japanese: Noji Corpus*,

Pittsburgh, PA: TalkBank, 1-59642-058-8.

Otsu, Yukio (1994) "Early acquisition of scrambling in Japanese," In *Language acquisition studies in generative grammar: Papers in honor of Kenneth Wexler from the 1991 GLOW workshops*, ed. by Teun Hoekstra and Bonnie D. Schwartz, 253-264, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Sano, Keiko (1977) "An experimental study on the acquisition of Japanese simple sentences and cleft sentences," *Descriptive and applied linguistics* 10, 213-233.

鈴木情一 (1977) 「日本の幼児における語順方略」『教育心理学研究』第 25 卷、200-205.

高井弘子・坂野雄二 (1984) 「幼児の語順ストラテジー」『千葉大学教育学部研究紀要』第 33 卷、45-56.

## 付録 実験で用いた実験文（分裂文のみ）

### 「文脈なし」グループで用いた実験文

Subject Cleft 1 : ウシさんを 追いかけているのは おさるさんだよ。

Subject Cleft 2 : イヌさんを たたいているのは キツネさんだよ。

Subject Cleft 3 : ブタさんを 蹴っているのは ウサギさんだよ。

Subject Cleft 4 : ブタさんを 押しているのは ウシさんだよ。

Object Cleft 1 : イヌさんが 追いかけているのは トラさんだよ。

Object Cleft 2 : ネコさんが たたいているのは ウマさんだよ。

Object Cleft 3 : ウサギさんが 蹴っているのは タヌキさんだよ。

Object Cleft 4 : パンダさんが 押しているのは クマさんだよ。

### 「文脈あり」グループで用いた実験文

Subject Cleft 1 : 誰かが ウシさんを 追いかけているよ。

ウシさんを 追いかけているのは おさるさんだよ。

Subject Cleft 2 : 誰かが イヌさんを たたいているよ。

イヌさんを たたいているのは キツネさんだよ。

Subject Cleft 3 : 誰かが ブタさんを 蹴っているよ。

ブタさんを 蹴っているのは ウサギさんだよ。

Subject Cleft 4 : 誰かが ブタさんを 押しているよ。

ブタさんを 押しているのは ウシさんだよ。

Object Cleft 1 : イヌさんが 誰かを 追いかけているよ。

イヌさんが 追いかけているのは トラさんだよ。

Object Cleft 2 : ネコさんが 誰かを たたいているよ。

ネコさんが たたいているのは ウマさんだよ。

Object Cleft 3 : ウサギさんが 誰かを 蹴っているよ。

ウサギさんが 蹴っているのは タヌキさんだよ。

Object Cleft 4 : パンダさんが 誰かを 押しているよ。

パンダさんが 押しているのは クマさんだよ。

## **On the comprehension of cleft constructions in child Japanese**

DANSAKO, Masahiko, and Go MIZUMOTO  
(Graduate School of Humanities, Kyushu University)

The purpose of this paper is to examine whether Japanese-speaking children can comprehend the sentence correctly by using the information of case particles. As discussed in Otsu (1994), when the context is given, children show adult-like responses to scrambling constructions, which have been said to be difficult to comprehend. This result appears to lead us to the conclusion that children can handle the information of case particles. The question now arises: Does this hold in other cases? To settle this question, we conducted an experiment of children's comprehension of two types of cleft constructions: Subject Cleft (*Buta-san wo oshitanowa uma-san dayo*. 'It is the horse that pushed the pig') and Object Cleft (*Uma-san ga oshitanowa buta-san dayo*. 'It is the pig that the horse pushed'). In order to understand these sentences, it is necessary to use the information of the case particle attached to sentence-initial noun phrase. The following intriguing results were obtained: (i) with context, their correct responses to Subject Cleft increased up to about 90% (ii) with or without context, three and four-year-old children correctly responded to Object Cleft at a rate of about 50%. Our results suggest that children do not depend on the information of case particles when comprehending the cleft sentences.

(受理日 2007年2月28日 最終原稿受理日 2007年6月21日)